

シンポジウム：話題提供者5

読み書き障害の早期発見と支援

北 洋輔

（国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター（NCNP））

発達性読み書き障害（Developmental Dyslexia：以下、読み書き障害）は、全般的な知的機能が正常範囲にありながらも、文字の「読み」かつ／または「書き」の習得と使用に著しい困難を認める障害である。WHOの国際疾病分類（ICD-10）では、特異的読字障害（F81.0）、特異的書字障害（F81.1）などに位置づけられる。本邦では、長年明確な診断基準が乏しく、診断や治療の遅れが顕著であったが、ガイドラインが策定された以降では急速に小児医療分野において診断・支援体制が整いつつある。

一方で、体系化された文字の学習が就学以降に開始される影響もあり、読み書き障害の診断は小学校低学年以降に下されることが多い。しかし、文字の学習のみならず、文字を使った学習が就学後に急速に展開されるため、読み書き障害児はすぐに学業不振が定着し、学校不適応という問題に発展することもある。厚生労働行政の一課題としてあげられる発達障害の早期支援を鑑みても、就学前での読み書き障害に対する早期発見と早期支援体制を充実させることは社会的急務を要する課題であろう。

これまでの読み書き障害の早期発見に関する研究は、主に幼児個人の認知能力の測定に焦点が当てられている。例えば、幼児期の音韻認識能力や Rapid Automatized Naming（RAN）の能力、視覚認知能力が就学後の読み書き能力を予測するとされる。だが、個々人の能力を測定する個別検査は、実施と評価に時間や費用を要するために、簡便にかつ短時間に障害をスクリーニングするという性質にはなじみにくい。

そこで私たちは、簡便にかつ短時間で読み書き障害のリスクの高い児をすくい上げるために、保育士や巡回相談員等が利用できる評価項目の開発を進めてきた。当日は、アセスメントツールの読み書き障害の評価項目について概説するとともに、3年間の追跡調査から就学前に評価した児の状態の“その後”をお伝えすることで、アセスメントツールを活かした支援法を紹介したいと考えている。